

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	竹井智子
論文題目	From Nowhere to Everywhere: The Inbetweenness in Henry James's Works after the New York Edition (「どこにも」から「どこでも」へ——ニューヨーク版後の作品におけるヘンリー・ジェームズの中間的帰属意識について)		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文の目的は、ニューヨーク版後のヘンリー・ジェームズの作品の精読を通して、彼の中間的な帰属意識の変遷を捉えることである。国際テーマや曖昧なセクシュアリティ、傍観者的な語り手など、これまで議論されてきたジェームズ作品の特徴の多くが中間的な帰属意識こそが彼の基本的特質であることを示唆しているが、これまで十分に論じられてこなかった晩年の作品に注目することには次のような意義がある。二十余年ぶりの故郷再訪やニューヨーク版のための自作の選定と改訂の経験を経て書かれたこの時期の作品群は、ジェームズの作家としての到達点を示していると考えられる。更に、この時期の作品は彼の帰属意識を考察する上で非常に重要であり、作家のアイデンティティの危機と回復、再肯定の過程を反映していると考えられる。</p> <p>第1章では、「一巡り」の主人公が感じる痛みに着目し、ジェームズのinbetweennessに由来する苦痛や絶望と、一方で中間領域に肯定的な意味を見いだそうとする試みの両方が描かれていることを指摘した。ジェームズは『ファイナー・グレイン』執筆の間、inbetweennessが孕む二つの感情、すなわち、自分の居場所は「どこにも」ないという感覚と、「どこでも」何にでもassimilateできるという自信との間で揺れ動いていた。また、本章では1908年の精神危機の経緯や背景についても言及しており、本論全体の前提となる議論を提供している。</p> <p>第2章では、「喪服のコーネリア」に描かれたニューヨークのセントラルパークの表象を、テキストに繰り返される「穴を穿つ」イメージと重ねて論じた。セントラルパークの持つ「現在に囲まれたフィクショナルな過去の穴」としての性格は、現代社会に取り残された過去の遺物である主人公の認識と、同様に現代アメリカ社会から忘れ去られたと痛感させられた作者自身の状況を反映している。さらに本作執筆後に作者が手掛けた自伝の語りによってもまた、現在の意識に左右されるフィクショナルな過去の穴としての記憶が示唆される。作者と主人公が共に記憶という「どこでも」ない場所に引きこもることが、ジェームズの中間的帰属意識の危機を反映している。</p> <p>第3章では、「喪服のコーネリア」、「ピロードの手袋」、「荒涼のベンチ」各テキストにおける黒色とその対照色(白・銀)の用いられ方に注目し、三作品それぞれの舞台や文脈における黒色の意味や、三作品に通底する対照色の役割を考察している。黒とその対照色は、異なる価値観同士の相互理解の不可能性という20世紀(初頭)社会の問題や、それに対するジェームズの絶望を反映している。しかし同時にそれは、相互理解がなくとも共存しようという、他者との新しい存立の在り方の可能性を見いだそうとする作者の姿勢を示唆している。その状態において、価値観と価値観を繋ぐ中間領域にこそ肯定的な可能性を見いだそうとジェームズは考えたのではないかと結んでいる。</p>			

第4章では、19世紀末から20世紀初頭にかけてロンドン郊外に成立したサバービアとサバーバンたちが含意する階層意識や上昇志向を踏まえて「モラ・モントラヴァース」を再読し、ミドル・ミドルに属する主人公が抱くサバーバンの価値観を指摘している。都市と田園の中間に位置するサバービアは物理的な中間領域であり、その住人であるサバーバンたちはミドル・ミドルとワーキング・クラスの間属する社会的に非常に不安定なロウアー・ミドルであった。主人公は否定的に描かれているとも言えるが、一方で、中間的な帰属を体現するサバーバンの土地や彼らの価値観が、20世紀中葉には社会の支配的な価値観になることをジェームズは予見していた、とする。

第5章では、ジェームズの自伝第2巻『息子と弟の覚書』における南北戦争の記述に着目し、南北戦争というジェームズにとっての間接的経験と火事による負傷という直接的経験の転覆的描写について分析し、彼が兵士の身体性と作家の非身体性の二項対立を無効化しようとしたことを明らかにした。ジェームズは、南北戦争というアメリカ人共通の記憶を利用して、身体的経験を言葉を通して読者に伝えるという作家の媒介性すなわち中間的アイデンティティ（偏在性）を肯定しようとした、と論じる。

第6章では、かつて奴隷貿易の重要な拠点の一つであったニューポートの知られざる歴史を背景に、『象牙の塔』においてジェームズが、どこまでも続く因果関係の連鎖を捕捉しようとしたことを論じた。そして『象牙の塔』の分析を通して、忘却された・終わった関係性のみならず、登場人物によって発言されなかった発話や実行されなかった行為を描くことで、プロットの外、さらには二人称の多用によってテキストの外にまでも関係性の網を広げ、ジェームズが作家の偏在性を表現しようとしたことを検証している。

第7章では、ジェームズの遺作である『過去の感覚』のテキストが、いかに批評家にとっての読む行為、作家にとっての読む行為、そして読者（我々）にとっての読む行為を描いているかを論じた。読み書きという永遠に終わらない連鎖運動を捕捉することで、ジェームズが時代を超えて読み継がれるテキストの中間的性質を前景化し、作家のinbetweenness（中間的帰属）を肯定しようとしたと論じる。

以上、本論考では、「どこにも」と「どこでも」の葛藤から、コスモポリタンの自己信頼に裏打ちされた偏在性とも言うべき「どこでも」感への推移を、ジェームズの晩年の作品群に読み取っている。

(続紙 2)

(論文審査の結果の要旨)

ヘンリー・ジェームズの作品については、これまで国際テーマや曖昧なセクシュアリティ、傍観者的な語り手といった特徴が議論されてきた。そして議論の多くが、中間的な帰属意識こそが彼の基本的特質であることを示唆している。本論文は、ニューヨーク版後のヘンリー・ジェームズの晩年の作品の精読を通して、この作家の中間的な帰属意識を再考することを目指している。

論文第1章では、晩年のジェームズが感じていた苦痛が『ファイナー・グレイン』収録の「一巡り」の主人公が感じる痛みと投影されている可能性を論じる。主人公は結局、自分の痛みを語るができないままであり、物語は最後に再会したもう一人の友人の自殺で幕を閉じる。しかし申請者は、ここに主人公の身体と友人の身体との間に最低限の相互理解が形成される可能性を見い出しており、それが「中間領域」を肯定したいという作者の想いの反映であると論じる。優れた作品論ではあるが、作品の主人公とジェームズの晩年の姿を重ねようとする論述に若干の強引さも感じられる。

第2章では、「喪服のコーネリア」のホワイト＝メイソンの認識を反映した語りや過去の思い出をどのように表象しているかを、「穴を穿つ」というイメージをもとに考察する。申請者は、ニューヨークのセントラルパークに立ち入るといった身体の動きを伴う行為を、「穴を穿つ」イメージとして、主人公の認識の在り方に、ひいては作者ジェームズにとっての記憶の在り方に比喩を超えたレベルで繋がっていると論じる。セントラルパークに入ることに「穴を穿つ」というイメージを重ね、それを「どこにもない場所」に結び付けるという申請者の解釈はやや説得力に欠け、公聴会ではさらなる説明を求める意見もあった。

第3章では、短編「喪服のコーネリア」、「ビロードの手袋」、「荒涼のベンチ」に描かれる黒色とその対照を成す色(白・銀)を手掛かりに各テキストが再読される。死者や過去、コスモポリタニズム、階級意識といった主題が、作者が過ごした土地を舞台に19世紀と20世紀の両方の価値観・視点の間で生きる人物を通して描かれるのはジェームズ作品の特徴であることはしばしば論じられる。しかし申請者は、これらのテキストにおける対照色は様々な価値観が完全な相互理解はなくとも共存する可能性を示唆している、とする独自の読みを展開する。

第4章では、「モラ・モントラヴァース」の舞台となったサバービアが執筆当時帯びていた社会的意味合いを踏まえて、テキストを再読している。他人と自己を区別して相手の優位に立とうとする意識こそが当時の社会で批判されたサバービア的価値観に他ならないこと、主人公シドニーがジェインやウィンブルドンと価値観を共有していること、19世紀末や20世紀初頭には揶揄され批判されたサバーバンの価値観が20世紀中葉には当時のイギリス社会の支配的な価値観となったこと、を指摘する申請者の読みは手堅い。そして作者がサバーバンという新しい存在にinbetweennessの力を見いだそうとしたと論じ、本論文全体の主張につながっている。

第5章では、ジェームズの自伝第二巻『息子と弟の覚書』におけるジェームズ自身の経験(火災の消火活動中の負傷)と南北戦争という国家の記憶の「奇妙な融合」を、身体感覚と言語的知識の交錯という観点から読み直している。リンカーン、アメリカ人作家ホーソー

ン、自身の背中への傷、そして書齋を同列に描くことで、ジェームズは南北戦争という国家的記憶を利用して作家ホーソンに繋がるアイデンティティを紡ごうとした、とする。第5章前半の「奇妙な融合」についての論述はオリジナリティに欠けるが、後半における自伝執筆が「どこにも」から「どこでも」に至るプロセスであるとの指摘には見るべきものがある。

第6章では、奴隷貿易の拠点の一つであったニューポートの歴史を背景に、『象牙の塔』においてジェームズが因果関係の連鎖を捕捉しようとしたことを論じている。ジェームズが、ニューポートの人々をめぐる因果を追究し、それをあらゆる関係へと敷衍して対立や序列を相対化することでヨーロッパ的価値もアメリカ的価値も否定しない極めてジェームズらしいアメリカ小説に作り上げようと企図していた、とする論考は目新しい。

第7章では、『過去の感覚』が、読む行為と書く行為という作家や文学史にとって日常かつ永遠に続く営みをメタ的に扱っていることを論じている。ジェームズの未完の遺作を精読し、作者がいかにあらゆるもの（関係性の網）をテキストの中に捕捉しようとしたか、また間テクスト性の網の中で読み継がれる文学テキストの中間的性質や読み書きという螺旋的に繰り返される行為を描くことでいかにテキストや作家のinbetweennessを肯定しようとしたか、を論じている。

論文第1章から第4章で扱われている短編集『ファイナー・グレイン』については、邦訳もなく日本でほとんど論じられていない作品群である。また、第5章から第7章にかけて扱われた作品も、原文は晩年の作者の口述筆記による極めて難解な構造を持つ。それらを丹念に読んだ上で独自の解釈を展開した申請者の非凡な語学力と論理の構成力については高く評価できる。また、どの章も一貫してジェームズの中間的な帰属意識について論じており、論文としての統一性がある。もっとも、公聴会では「本論は作品論か作家論か」という質問が出たほど、作品を晩年の作者の姿に重ねようとする本論の姿勢には若干の危惧が感じられることは事実であり、今後の研究に際してはより精査が求められることは否めない。

本論文は、「どこにも」の不安と「どこでも」への自信との間で揺れ動いた作家ヘンリー・ジェームズ的心情が収録作品にどのように表れているかを丹念に論じている。その分析は、ジェームズが生きた時代についての幅広い理解に基づいており、いくつかの知見が見られる。このような視野から書かれた本論文は、ジェームズ文学の研究に大きく貢献すると思われる。その意味で、共生人間学専攻思想文化論講座の理念に十分適う優れた研究である。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和元年10月17日、論文内容と要約、およびそれに関連した事項について試問を行なった結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、出版刊行上の支障がなくなるまでの間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降